

「やっと、お二人ともわたしたちの住む森へやってきてくれましたね。」

エルムは、言葉を続けて言いました。

「わたしたちは、あなた方をお願いがあるのです。そのために、お二人に蝶の姿になってこの世界にやってきてもらいました。わたしたちは、あなた方の力を必要としています。どうか、協力してくださいませんか。」

エルムだけでなく、他の蝶も祈るような表情で二人を見つめています。

「わたしたちに協力してほしいことって、一体どんなことですか。」



エルムは、話し始めました。

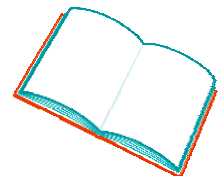
「この森は、たくさんの昆虫が楽しく過ごしていて、いつも笑い声に満ちあふれていました。ところが、ある日突然、蝶以外の昆虫が、この森から消えてしまったのです。通りかかった魔法使いが、この森を暗闇の世界に変えるために蝶以外の昆虫を全て消してしまったのです。わたしたち蝶だけは、辛い難をのがれました。わたしたちの羽についている「鱗粉」には、魔法をはね返す力があつたのです。わたしたちは、魔法使いに何度も頼みました。」

『みんなをこの森へ戻してください。』

しかし、魔法使いは首を振るばかりです。そして、

『おまえたちには、仲間を助けることなどできるはずがない。』

そう言うと、魔法使いは笑いながら飛び去って行きました。



しばらくわたしたちは、何も言うことができず、呆然としていました。しかし、『困ったときには、蝶の図書館に保管してある書物を見よ！』と昔の蝶たちがよく言っていたことを思い出したのです。そこで早速、わたしたちは、図書館へ行って調べてみました。すると、昔から伝わる書物に、こう書いてあつたのです。

『森の奥深くへ行くと、大きな滝がある。その滝の奥の洞窟の中に【友情の花】という花が咲いている。【友情の花】を採り、その花を魔法使いへ向けると、光を放つだろう。すると魔法が弱まり、仲間は助かり、魔法使いはこの森へ二度と来ることができなくなるだろう。しかし、それを採るには、人間の男の子と女の子の力が必要になる。』

と。

それで、わたしたちは、あなたたち二人をこの森へ連れてきたのです。」

「でも、わたしたちは蝶の姿になっているわ。わたしたちを連れて行っても、人間の姿

でないから、役に立たないのではないかしら。」

エルムをじっと見つめていたマヤが、口を開きました。

「それは、大丈夫。」

エルムは、自信満々に答えました。

「人間の姿に戻すのは、蝶の姿にするのと同じくらい簡単さ。でも、森の奥深くの滝の所へ行くには、蝶の姿の方が都合がいいのさ。」

これを聞いて二人は、昆虫たちを助けるために滝へと行く決心をしました。そして、早速エルムや他の蝶たちと一緒に出発したのです。